

「葛飾柴又の文化的景観」ニュース

都会の中の農村風景

「どこか懐かしさを感じるまち」、柴又を訪れた方の言葉に思いを馳せた時、綿々と積み重ねられてきた柴又の歴史の中の「農業」の大切さが見えてきます。大都市・東京にあって多くの農地を有する新鮮野菜の生産地・柴又。農家の方々が副業的に営んだお店が由来となった帝釈天門前のまち並み、旧家の佇まい、柴又用水跡、まちの区画、至る所で農村由来の特徴を見つけられます。日本を代表する景観地として評価された柴又の3つの価値のひとつ「都市と農村の両義性」。今号は、農村の風情と共に都市的な発展を遂げてきた葛飾柴又の魅力を紐解いていきます。

柴又を守った村人の心意気と団結を伝える記念碑 ～柴又勸農事績碑～

「葛西三万石」といわれた柴又を含む葛西領一帯は、米の産地であると同時に、江戸時代中期から後期には大消費地・江戸の需要に応えるため、野菜生産が発展しました。柴又も江戸期の新田開発によって米や野菜の生産量が増加しました。しかし、度重なる水害や天明年間(1781-1789)の全国的な飢饉が村を疲弊させ、天明後期の大凶作時には、貧窮のために80人余りが村を離れてしまったそうです。そんな苦難の時代に柴又村の農業の復興に尽力したのが、安永6年(1777)に村の名主役に就任した齊藤七郎右衛門です。勤勉家として知られた七郎右衛門は32歳の若さで名主に選ばれ、村年寄たちと協力して荒廃した田畑の再墾に尽力しました。寸暇を惜しんで種子の交換や荒地の利用法の研究等を行い、良い方法があれば村人に教え、私費を投じて堤防や橋、道路、用水路等を修築しました。また、職のない村人に職を与え、副業を奨励するなど、勤勉に働くことを督励したのです(『葛飾区史』1985)。こうして柴又村は見事に復興を果たしました。これを成し遂げたのは、柴又の人々が一丸となって協力し取り組んだ、その心意気と団結力だったのです。

寛政10年(1798)、代官小野田三郎右衛門はこの功績を高く評価し、七郎右衛門に銀10枚と苗字帯刀の許可、村人には米を褒美として与えました。この30年後、柴又村の人々は石碑(写真左)を建立します。柴又の鎮守・八幡神社の境内に佇むこの記念碑には、柴又を守ってくれた先祖への感謝の気持ちが込められています。そして、その功績を後世に伝え、未来を生きる柴又の人々が幸せであってほしい、そんな願いが伝わってきます。



柴又八幡神社



柴又勸農事績碑
(区指定有形文化財)

柴又の農業発展の礎「柴又用水」

江戸後期の天保6年(1835)に開削された柴又用水は、柴又の歴史において極めて重要です。当時、江戸川と中川に挟まれた地域は、8代将軍徳川吉宗の時代に幕府勘定方であった井沢弥惣兵衛が整備した小合溜井(都立水元公園)を水源とする上下之割用水が流れていました。上下之割用水は小岩用水や西井堀等の支流に分岐して南方に流れ、灌漑用水として耕地に水を供給していました。柴又用水はこの小岩用水から水が引かれ、微高地(図の赤い部分)の縁に沿って東西に本流、南に支流を流し、これにより柴又南部の耕地開発が進みました。大正時代の土地利用を見ると南部の低地に水田、本流の北側に畑が広がっていました。ここで生産された「葛西菜」等の青物が江戸に出荷されていたことが分かる記録があります。柴又村の名主・幸七の



柴又地域の地形段彩図と用水流路(薄桃色は小岩用水、桃色は主な柴又用水の流路) (裏面に続く→)

書状に、収穫した青物を鮮度維持のため夜中に船で江戸まで運び、未明を待って市場で売ったとあります。しかし、幕末に治安維持を理由に運河への夜間の乗り入れが禁止され、幸七は金町村の名主と共に周辺24ヶ村を代表して再許可を求めて認めてもらいました。柴又が葛西有数の農村として江戸の青物需要に応える生産力を有し、故に江戸に通じる運河の利用が特別に許可されていたのです。

農業の発展は柴又に利潤をもたらし、まちの発展を牽引しました。美しい生垣に囲まれた旧家の佇まいや寺社の豪華な伽藍から当時の隆盛が窺えます。伝統行事は寺社を核とした地域のコミュニティや絆を強める役割を果たしました。また、柴又名物「草団子」「煎餅」は、柴又の農業と深く関わっています。江戸市中で庚申信仰が流行し、帝釈天の参詣客が増加する中、農家の方が門前に仮設店舗を出し、柴又産の米や江戸川で採れたヨモギを使った食べ物を販売するようになります。当初、庚申の日限定でしたが、次第に常設化して参道のまちなみが形成されていきました。今に続く柴又名物は“地産地消”の逸品であり、



耕地整理と柴又用水(昭和5年 個人蔵)



歩道として整備された柴又用水跡

門前町と農村の2つの顔を併せ持つ柴又ならではのおもてなしの品なのです。現在、その役割を終えた柴又用水は歩道としてその面影に触れることができます。江戸川と柴又用水を繋ぐ役割を果たした江戸川河川敷の新八水路もまた、今は水生昆虫や魚が生息する豊かな水辺環境としてその名残をとどめています。帝釈天題経寺や八幡神社が鎮座する微高地を中心に、低地を開発しながらひとつの領域として発展してきた柴又。柴又用水の面影を探しながら柴又を散策してみると、先人の努力と柴又への思いが伝わってくるようです。

江戸の人々も美味しく食した葛飾の野菜

□ **江戸の冬野菜** 江戸時代、隅田川以東の葛飾区周辺は、江戸へ供給する野菜などの産地として有名でした。それには大きく2つの理由があると言われています。ひとつは、沖積地ならではの砂質土壌のため水はけが良く、野菜作りに適した環境であったこと。もうひとつは、河川・水路の整備が行き届いていて、舟運により新鮮な野菜を大都市・江戸に出荷できたことです。江戸に供給される野菜の中でも冬季にかけて旬を迎える小松菜は、中川左岸の小松・小松川(現在の葛飾区南西部・江戸川区北西部)の特産物として栽培されていました。冷蔵庫のない時代、食料の乏しい冬に生産される「小松菜」は、江戸の人々にはなくてはならない食材でした。江戸・東京の雑煮に「小松菜」が添えられているのは、このような歴史的背景があります。

□ **葛西菜のブランド化** 実は「小松菜」は、江戸の始めには「葛西菜(かさいな)」と呼ばれていました。葛西と聞くと駅名もある江戸川区のことと思うかもしれませんが、歴史的には葛飾・江戸川・墨田・江東区域を合わせた領域名です。葛飾区に葛西神社(東金町)や葛西城跡(青戸)等の施設名があるのは、この地域が葛西という領域だったことの名残です。江戸中期に記された『続 江戸砂子温故名跡志(ぞくえどすなごおんこめいせきし)』の江戸の名産の項には、「葛西菜(中略)いたつてやハらかに、天然と甘みあり、他国になき嘉品なり(葛西菜は柔らかく、自然な甘さがあり、他国にない逸品である)」と記され、さらに「葛西菜にまされる八なしといへり



葛飾元気野菜「小松菜」

(葛西菜に勝るものはないといえる)」と、京都・東寺の水菜、大阪の天王寺菜、近江の日野菜など全国の菜と比較してもとても美味しいと称賛されました。この「葛西菜」が「小松菜」という名になるのは、一説によると小松川村の梶屋九兵衛が品種改良したことによるとも、徳川将軍家が小松・小松川辺りで鷹狩をした際に献上されたためとも言われています。後者は、「小松菜」と徳川将軍との結びつきを強調することで「葛西菜」のブランド化を図ったのかもしれませんが。

□ **江戸の伝統を継承する葛飾元気野菜** 「小松菜」は、今でこそ通年で栽培される野菜ですが、昔は正月に備えて秋頃から種まきが行われていました。ビタミンA・Cやカルシウムなどが豊富で、炒め物や和え物、お浸しなどの具材として全国各地で栽培されている野菜です。葛飾区でも年間725トン(令和2年)生産されており、都内ではトップクラスです。近年、農地が減少してしまいましたが、現在でも水元・奥戸・柴又・高砂地域を中心に畑地があり、江戸の人々が美味しく食した小松菜の産地の面影は「葛飾元気野菜」として息づいています。国の重要文化的景観に選定された柴又にも、この「葛飾元気野菜」を生産している農家の方がいらっやいます。「葛飾柴又の文化的景観」は、江戸の伝統を継承する「葛飾元気野菜」をさらに後世へと伝えていくサポートをする取組でもあるのです。

柴又の農業を支える人々

中村一男氏 私の就農は昭和30年(1955)。20年程前まで、柴又の多くの農家は市場に野菜を出荷していました。最初は神田市場でしたが、大田への移転により、私達も10年位大田の市場に通いました。その後、農協が柴又に直売所を開設してくれたので、そちらに出荷するようになりました。市場に行っていた頃は、暮れから正月はネギ、その後、カブや亀戸大根、それが終わるとキャベツ、夏はキュウリやナス、枝豆、秋は小松菜や大根、暮れも押し迫ると山東菜などを作っていました。現在、冬はブロッコリー・キャベツ・ネギ・白菜・小松菜のほか、明治神宮の新嘗祭に奉納する宝船のための聖護院大根、白菜、赤丸大根なども栽培しています。昨年12月の葛飾区秋野菜品評会では、白菜が特別賞を頂きました。私も高齢ですが幸い健康なので、これからも農業を続けたいと思います。



戸室義一氏 うちが明治22年(1889)から農業をしていて、私で4代目です。以前は柴又4丁目に畑がありましたが、今は松戸の畑で小松菜を作って、柴又の元気野菜直売所に出荷しています。生まれは昭和の初めで、中学卒業後16歳から農業を始めました。就農当時は全てが人力で大変な重労働でした。昔から柴又の人は本当に働き者で、これでは嫁が来てくれないということで、私達の世代が農休日を作って下さいと声を上げたんです。それで昭和32年(1957)頃に年齢問わず全世代を対象とした農休日が制定されました。柴又の古い話は祖母から聞きました。昔、庚申の日は多くの参拝客が来ていて、農家は手持ちの米で赤飯や混ぜご飯を作って売っていました。本家が参道に土地があるので、うちの初代は草団子をつくお手伝いに行っていたそうです。私も高齢になりましたが、柴又小学校の一角に田んぼを作って、小学生に田植えを教える活動を最近まで行っていました。あの活動は長く続いたなと思います。



保管されている「柴安」瓦

齊藤一雄氏 江戸後期から代々農業をしています。私の就農は30歳頃。幼い頃の柴又の農家は米や様々な野菜を作って市場へ出荷していましたが、中学生位の頃、周辺は全部ワケギ畑でした。30年程するとワケギの売行きが落ち、また色々な野菜が作られるようになりました。現在は小松菜とほうれん草、枝豆などを作って直売所や四つ木のイトーヨーカドーに出荷しています。夏の採れたての枝豆は本当に美味しいです。新鮮な野菜の美味しさは昔から変わりません。都市農業は身近に消費者がいらっしや、直接「美味しかった」と言って頂けるのが嬉しいです。文化的景観に選定された柴又の風景は心に残る風景です。今後に残ってほしいです。また、柴又は安心安全に暮らせるまち。ずっとそんなまちであってほしいですね。



齊藤國松氏 代々農業一筋の家です。私自身は就農して36年になります。就農当時は、柴又に10件程農家がありましたが、今は半減しています。うちは、冬に小松菜・ブロッコリー・白菜・キャベツ・レタス・大根・カリフラワー、夏になると枝豆・トマト・ナス・キュウリ・バジルなど多品目を作っています。出荷先は元気野菜直売所や地元スーパー、市場のほか、家の畑の一角で採れたての野菜を販売しています。直接顔を見て買っていただけるので、お互いに安心感がありますね。今年から息子夫婦が農業を継いでくれたので、どんな展開になるか楽しみです。将来的には農地は減っていくのだと思いますが、将来世代にできるだけ良い環境を残していきたいです。

齊藤辰典氏 令和5年(2023)5月から夫婦で農業をしています。農業を始めて間もないですが、これから自分達がこうしていきたいということを、どんどん考えて行動を起こしていきたいです。まずは自分達が農業を楽しみ、その中で柴又地域の方々、葛飾区の方々に美味しく新鮮な野菜を提供し、笑顔になって頂くことが目標です。私自身、柴又に20年以上住んでいますが、同世代の人達とざくばらんに話せる場は多くないと感じています。若い人も含めて様々な世代や立場の人が意見交換しやすい環境作りは、今後地域にとって大事になると思います。



齊藤幸雄氏 平成14年(2002)の就農以前は、茅ヶ崎にあるサーフィン業界の会社に勤めていました。当時、会社の先輩が父親の農園で作った野菜をBBQで振舞ってくれたんです。スタイリッシュでカッコいいその先輩が「畑仕事って面白いんだよ」と言っていて、それがすごくキラキラして見えたんです。それまで実家の畑仕事を客観的に見たことがなかったので、そんなに良い仕事なら見てみたいと思い、農業に興味を持ちました。現在はトマト・レモン・イチジク・トウモロコシを栽培しています。レモンは始めたばかりですが、秋野菜品評会で特別賞を頂きました。トマトは養液栽培をしていて、都市の限られた農地面積でも連作障害を最小限に減らせます。農地が少ない都市農業ですが、身近にたくさんの消費者に恵まれています。葛飾には元気で前向きな若手農業者が多くいます。今後も新しいことを色々仕掛けていきたいですね。



□ **文化財防火デー** 1月26日、帝釈天題経寺で花音さん(モデル・俳優)を一日消防署長にお迎えして消防演習が行われました。火災発生を想定し、上人による初期消火に始まり、柴又自治会・柴又神明会・金町消防団・金町消防署の皆さんによる消火活動など本番さながらの緊張感の中での演習となりました。ご挨拶された東京都教育庁の鈴木徳子氏は、新年早々に能登半島で発生した地震に触れられ、「現地の文化財も甚大な被害を受けた。このような日頃の訓練や取組が重要になる。」とお話されました。また、講評された金町消防署長の五十嵐潤一氏は「かけがえのない文化財を次世代に大切に引き継いでいくためには地域の力が重要であり、地域の子も達と一緒に訓練を行えたことが意義深い。」とお話されました。



睨みをきかせながら
参道を歩く赤鬼と青鬼



□ **節分会** 「息を吹けば、火難、水難、風難、疫病など、あらゆる災厄をもたらすことができる」という恐ろしい鬼たちに対して、神猿が「帝釈天王の威光ある柴又でそんなことができるか」と勇敢に立ち向かい、「柴又の猿の恐ろしや」と退散させました。2月3日、帝釈天題経寺で執り行われた節分会。参道から境内に入ってきた赤鬼・青鬼、そして、帝釈天の使いとされる神猿によって繰り広げられたこの問答には、平穏な暮らしへの願いと自然などへの畏敬、そして、柴又のことを大切に思う人々の気持ちが込められているのです。



□ **年末の風景** 12月18日、笹の葉で諸堂や二天門の彫刻等が払い清められました。煤払いをされたお二人の上人は、「毎年、この日は一日かけて一年の感謝を込めてお寺のお掃除をしています。」と話してくださいました。

**柴又の年末
年始の風景**

□ **年始の風景**

初詣で賑う青空のもと、1月5日、帝釈天題経寺参道と境内で新春はしご乗りが行われました。



ご注意ください

「葛飾柴又の文化的景観」の選定範囲内では、工事を行う際には届け出等が必要となる場合があります。

- 柴又まちなみ景観ガイドライン
帝釈天境内の景観、江戸川堤、柴又公園等(高台)からの眺望、参道から帝釈天への通景に関わる内容
- 葛飾区景観地区条例等
柴又地域景観地区内で建築物や工作物の新築、新設、外観の変更等を行う場合
- 重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規則
「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素の工事を行う場合

【お問合せはコチラ】

葛飾区生涯学習課文化的景観係
〒124-8555 葛飾区立石5-13-1
TEL 03-5654-8477
FAX 03-5698-1541

「文化的景観ニュース」のバックナンバーのほか「葛飾柴又の文化的景観整備計画」や「文化的景観パンフレット」をご覧ください。

